
アイツに恋してる

不川 恐子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイツに恋してる

【Nコード】

N2211Y

【作者名】

不川 恐子

【あらすじ】

ツンデレ少女の刺条 甘南は、7年間片思いしてきた彼に恋人が出来てしまったと知りある決心をしました。
その決心とは……？

誰にも渡さない

1. 誰にも渡さない

私は不川 恐子といいます。このお話の脇役兼語り手ナレーターをします。

私が脇役なら主人公は誰かといいますと、ある一人の厄介な性格の少女で、彼女

とその仲間たちが繰り広げるお話なのです。では早速お話を始めましょう。

このお話の厄介な性格の主人公は、名前を刺条 甘南といいます。彼女は色白で

一見おとなしそうに見えますが、実はかなりのおてんば。おまけに性格は自分の気

持ちに正直になれない、重度の「ツンデレ」なのです。そのためか、変わり者の甘

南の友達クラスでたったの二人。帰国処女の美少女、舞谷 瑠璃とこの私、不川

恐子しかございません。しかし彼女は頭がよく、さらに運動神経もいいので友達

はいなくても、常に注目の的。そしてモテモテであったのです。モテモテなわり

には、まだ彼氏はいません。それは、彼女にはずっと片思いしてきたある人がいた

からです。彼女はその厄介な性格のせいで、その好きな人と今年で7年も同じクラ

スなのにまともに、会話したことがないのです。しかし。中学生になってもう半年

が経とうとしている、この時期ようやく彼女は行動をおこしました。というか、行

動をおこさなくては自分の恋が叶わなくなってしまう事態が発生し

たからです。そ

う、彼女の好きな彼、藤田 徹に彼女が出来てしまったのです。

彼女はその話を噂で聞き、大変落ち込みました。私と瑠璃がずっと慰めてあげて

も全く反応しないほどの落胆ぶり。しかし彼女はある女性たちの一言により、落ち

込むことをやめ行動をおこすことに決心したのです。その女性たちとは私たちのク

ラスメイトの服岡 美季と大崎 マリンでした。この二人は甘南が落胆しているの

を見て、

「そんなに彼が好きなら今の彼女から彼を奪っちゃえばいいんじゃない？」（マリン）

「そうそう。略奪愛ってところね。」（美季）

といったのです。すると彼女はたちまち魔法にかけられたように、ショックから回

復し私と瑠璃にある宣言をしました。彼女の宣言を聞いて、美季とマリンも手伝う

と申し出ました。その宣言とは・・・。

「あたし、徹の彼女から徹を奪ってみせる！」

というものでした。

「徹は誰にも渡さないんだから。」

意気揚々と甘南は言い放ったのでした。

あなたのことをもっと知りたいの！

2. あなたのことをもっと知りたいの！

どうも。不川 恐子です。前回、このお話の主人公刺条 甘南は大好きな彼、藤田 徹をその彼女の徳永^{とくなが} 愛花^{あいか}から奪うことを宣言したわけですが、ひとまず私たちの意見としてはもっと彼について知る必要があるということになりました。そこで彼のことを知るため、甘南には彼とデートをしてもらうことにしました。甘南はそれはやる気満々で、絶対デートに行くと言いました。彼女もちの男とデートに行くなんて、常識的に考えて無理なはずなのですが、甘南自身が絶対に行くと言ってしまったのでこの計画は必ず決行しなくてはいいけないのです。

というわけで、今日は「アイツとデートに行こう作戦」（甘南は徹のことをアイツと言っておりました。）の第一回作戦会議なので、まずは徹と彼女の愛花の基本データを調べることにしたので、この作戦におけるデータ処理委員の私が始めに話し始めました。

「藤田 徹。13歳。中学1年生。B型、8月12日生まれ。物事をあまり深く考えない性格。軽い感じで女好きのように見られがちだが、実際にその通りの性格。しかし、持ち前の明るい性格からか、女子の人气が高い。彼女は、徳永 愛花。A型の、3月7日生まれ。純粹で清楚なイメージが強い。が裏の顔は誰も知らない。一説によると、男好きの超腹黒悪女という話もある。以上。」

長くしゃべり続けたせいか、少し疲れた私はあとは一言もしゃべりませんでした。私が話し終わってすぐに、計画立案委員のマリンが「愛花って結構ワルだったのね。まあ、薄々そんな気はしてたけど。」

「いいました。続けて、スタイリスト委員の美季が

「この基本データからいくと徹って女好きらしいから、作戦がうま

くいけば簡単に略奪できちゃうかも。」

にこにこしながらいいました。最後に副委員長の瑠璃が会議のまとめにかかりました。

「恐子が調べてくれた基本的なデータをもとに、マリリンが計画をたててね。今回のテーマ”彼についてもっと知ろう”に合うような素敵な、お洋服を美季が選んであげる。作戦はこんな感じかしら。それで決行日だけど、次の土曜日でいいかしら？甘南。」

さすが私たちのクラスの学級委員を務める、瑠璃はてきぱきと作戦の大まかなところをまとめてくれました。

「ええ、大いに結構よ。みんな、あたしのためにお願いね。」

甘南は満足そうにうなずきました。

「では、マリリンが徹に話をつけてちょうだい。普段からよく話すでしょ。」

マリリンは1年生にして男子テニス部のマネージャーをしています。徹はテニス部なのでその関係で二人はよく話しています。しかし、この作戦が開始してからは以前よりは話さなくなりました。きっとマリリンは甘南に気を使っているのでしょう。

「了解。絶対にOKさせるから。」

こうして、作戦の準備は着々と進んでいくのでした。

あなたのことをもっと知りたいの！？

3. あなたのことをもっと知りたいの！？

あつという間に決行日となる土曜日となりました。甘南は美季がセレクトしました、洋服を着てマリンの立てた計画通り、「桜丘シヨッピングモール」一階の「きらきらホール」の大きな柱の陰で徹のことを待っていました。他の柱の陰には、瑠璃や私、美季とマリ、そしてなぜか男子テニス部の一年生が勢ぞろいしていました。

「ごめんね。野次馬いっぱい。徹と甘南がデートするって話、聞かれてみたい。」

マリンはテニス部の皆さんにくれぐれもこちらの存在がばれるような行動は慎むことと、注意していました。まるで遠足にきた幼稚園児の先生のようにです。

そうこうしているうちに、徹がやってきました。甘南はいつものように冷たい態度をとっていますが、略奪を決めたのでいつもよりはいくらか、まともな会話が成立している様子です。二人が移動しました。どうやら最初の目的地に向かっているようです。

「美季、二人の尾行のほうはよろしく。他の人たちはそれぞれの持ち場に待機よ。」

マリンが小声で指示を出しました。

「OK。じゃあ、行くね。」

美季は走って二人を追いかけてきました。マリンは2階のカフェ。瑠璃と私は、3階の雑貨屋さんの前に待機することになっています。ちなみにテニス部の皆さんは、連絡が入るまで各自自由に遊んでいとの命令がマリンから下されました。

二人は最初に私たちがいる3階の雑貨屋さんにやって来ました。ここでは、甘南が徹といろいろな商品を見ながら、徹の好きな色や好みなどを聞き出そうという作戦でした。しかし、甘南は徹と自然に会話が出来るのでしょうか……。私たちが見守るなか、甘南の

いつもより小さめの声が聞こえます。

「どこ・・・行く？」

当初の作戦では甘南が自分からこの雑貨屋さんを見たいというはずだったのですが・・・自分の気持ちをうまく伝えることのできない甘南は、どう誘えばいいかわからないようです。ゆつくりと歩く二人はどんどん雑貨屋さんに近い近づいていきます。それにつれて、甘南の顔もどんどん険しくなっています。明らかに困っているのは、誰にでもわかることでした。見かねた瑠璃がマリンに連絡すると、マリンは慌ててやってきました。そこにはちょうど自由行動をしていたテニス部の皆さんもいらして・・・。

「ああ。見てられない！ちょっと理紅っ。」

マリンはテニス部の中からある男子に向かって声をかけました。それは徹の一番の親友の園宮 理紅でした。彼のことをずるずると引きずって、甘南たちの視界にはいるところに行くと。

「この店素敵っ！！入ってみよ。」

と強引にも理紅の腕に自分の腕を回して、店の中へと入っていきました。それをみた、甘南は一瞬迷ったように眉をひそめました、すぐに

「徹！」

上ずった声で彼の名前を呼び、

「この店見てみない？」

と恐る恐る聞いて、彼の顔を覗き込みました。そして徹が答えるよりもはやく、顔を真っ赤にしながら

「べ、べつにあたしが見たいわけじゃないんだからねっ！あんたが見たいんじゃないかって・・・。」

言い訳をしました。徹はそれを不思議そうに見つめていましたが、くすつと笑って

「わかったよ。行こ。」

と徹は甘南を引っ張って店の中に入りました。このとき二人は気づいていないようでしたが、徹は甘南のことを連れて行こうとしっか

りと甘南の手を握っていたのでした。それは今までの少し不自然な会話とは違い、とても自然な行動のように思えました。後日そのことを二人に伝えようと、甘南は恥ずかしいながらもツンデレな態度で押し通し、徹のほうは「ふーん。」といっただけの以外にあっさりとした彼女持ちとは思えない反応でした。この反応を見て、私をはじめ瑠璃や美季やマリンはある素敵な可能性に気づいてしまったのです。

もしかして徹は甘南のことを・・・・・・・・。

しかしそれはあくまでも可能性の話でしたので、私たちは確かな証拠を得るまでは心の中にしまっておくことにしたのでした。

どうして？

4. どうして？

こんにちは。不川 恐子です。あの作戦から1週間がたちました。どうやら愛花さんにもデートのことは知られていないようですし、素敵な可能性を見つかってしまったということでしたので、作戦は大成功といえるでしょう。甘南は偶然にも徹と手をつないでしまったということに恥ずかしいながらもとてもうれしそうに感じているようです。また、今回のことがあってからは少しは話せるようになったとも言っております。

そんな幸せなときに一つ事件が起きました。それは今日の理科の授業での出来事で発生しました。理科の席順は教室とは違う席になっています。徹と愛花と甘南は同じ班です。今日は班ごとに実験をすることになっていました。早速実験の準備に取り掛かります。今日は薬品実験なので実験の際は注意しながら行うようにと先生がおっしゃっていました。

「次はどれだっけ・・・。」

甘南は実験の手順を忘れたのか、困ったように徹をチラッと見上げました。が、

「次はこれよ。」

愛花が徹より先に薬品のびんを甘南に手渡しました。甘南は思いっきりしかめ面で、

「どうも。」

とつめたい態度をとりました。そして薬品を入れた瞬間。
がしゃーん！！

大きな音がして、フラスコが爆発してしまいました。入れる薬品を間違えたのです。

「きゃー！！！」

愛花が顔を青くしてうずくまりました。甘南もその場にしゃがんで

います。先生は職員室にいつてらしたのでそこには生徒しかいませんでした。理科室は別館にあったので他の人たちにも爆発の音は聞こえないようでした。

「愛花っ。」

徹はフラスコの一番近くにいた甘南よりも一番遠くにいた愛花に駆け寄りました。甘南は爆発で指に怪我を負いました。愛花は全くの無傷です。確かに愛花は徹の彼女ですが、この場合甘南のことを先に心配するのが普通ではないでしょうか。甘南は指を押さえながら唇をかみしめ、うつむきました。

「甘南、保健室に行ったほうが・・・。」

瑠璃が心配そうに甘南の顔を覗き込みました。すると甘南は立ち上がって

「どうして・・・徹のばっか。」

と小さな声でつぶやいて一人で保健室へといってしまいました。徹は「あっ、甘南待って!」

と追いかけてやりましたが、徹によりかかっていた愛花がぎゅっと徹の腕をつかみました。そこで徹はまた愛花のそばに座りました。

「いっちゃだめ。徹はあたしの彼氏でしょ?」

愛花が徹にささやいたこの言葉はだれにも聞こえることはありませんでした。

晩秋のラブロマンス　くひとめぼれく

5・晩秋のラブロマンス　くひとめぼれく

おはようございます。すずしい秋の朝でございます。不川　恐子です。さてさて、理科での爆発事件で甘南の怪我は予想外にひどく、利き腕の右手を怪我してしまったので、学習ができないためしばらくお休みすることでした。しかし、甘南が休んでる理由は怪我だけではなく、きっと怪我をしている自分よりただ怖がっているだけの愛花のことを心配した徹に会いたくなかったのかもしれませんが。そういう理由で今回のお話は主人公の甘南を抜きに進みます。

今日で甘南が休んで3日目です。朝、私と美季と一緒に登校していますと、前方にマリンが一人で歩いているのが見えました。

「マリン——！」

美季が元気にマリンの名前を呼びました。すると、マリンが振り向ききました。

「ああ。おはよう……。。」

3人で歩いていますと、

「やっぱさあ、甘南ショックだね。この間の作戦で徹と結構いい雰囲気だったのに。」

「そうですね。」

わたしと、美季が甘南のことを心配しながら話しているといつもはおしゃべりなマリンは、話には入らず何か深く考え込んでいるようでした。

「マリン、なんか悩み事？」

「うん……。。」

マリンは深刻な顔で頷くと話し始めたのでした。

「実はさ、昨日のテニス部の練習の休憩時間に部員の好きな人の話になったんだ。そのときさあ、理紅の好きな人が……。。」

そこでマリンは言葉を止めました。美季は真剣にマリンをみて

「誰？」

と聞きました。

「・・・な。」

マリンはとても小さな声で言いました。

「えっ。なんていった？」

「甘南だったの！理紅の好きな人は！」

「えっ。でも理紅は瑠璃のことを・・・。」

理紅と瑠璃は幼稚園の年少の頃からの幼馴染でした。理紅は気づいていないようでしたがどう見ても瑠璃が好きなのでした。

「この間の理科のとき・・・あの爆発が起こったとき。甘南が保健室いって早退するから隣の席の理紅が荷物を保健室に運んで言ったでしょ？そのときに事件は起こったのよ。」

マリンはそういつて教室の自分の机に荷物を置くと、

「今から再現するから見ててね。」

―それは夕日さす保健室での出来事。理紅が保健室に入ると保健の先生はいなかった。奥の椅子に甘南が一人で腰掛けていた。

「あれっ。先生は？」

そういうと甘南はびくっとして理紅のほうに振り返りかえった。

「理紅。あああたしの荷物？それ。」

右手を押さえいった。

「うん。大丈夫？甘南。」

「大丈夫。心配ありがと。」

「・・・、あのさ理紅。」

「何？」

「あたしってバカよね。」

甘南は茜色にそまった校庭を窓越しにみながら物悲しげな顔でつぶやいた。

「彼女いるのに自分のこと心配するなんて期待しちゃって。」

いつもはツンデレな甘南がそんな悲しげに自分の思いを語る姿を見

て、理紅は・・・。」

「っていうことなのよ。」

マリンはその様子を丁寧の説明してくれました。そこに偶然いた徹は「で、どうする？」

といつの間にか私たちの会話に徹が勝手に割り込んできました。

「なんであんたが話し進めようとしてんのよ。」

美季がげげんな顔で徹をにらみました。

「いいじゃん。理紅は俺の親友だし。」

「そんなこと言って、ただ面白そうだから参加したいただけでしょ。」
美季は言い返しました。

「まあいいでしょ？ 美季。それにコイツがいたほうがいろいろ使えるじゃない。」

マリンは美季をなだめ、せりふの後半を小声でいいました。美季は納得した様子で急に徹への態度を変えました。

「徹は親友の理紅のこと心配してるんだよね。そういうことなら、存分に協力して。」

「なんか態度変わりすぎじゃ・・・。」

「みんなおはよう。今日も甘南休み？」

瑠璃が登校してきました。

「今はもうおしまい。続きは放課後にしよっ。」

マリンの言葉でこの場はお開きとなりました。

「何々？ なんの話？」

瑠璃が不思議そうに聞いてきましたが、みんなは困ったような顔でそれぞれの席へ着席したのでした。

晩秋のラブロマンス? ―「恋してる宣言」―

6. 晩秋のラブロマンス? ―「恋してる宣言」―

退屈な授業が終わり、放課後となりました。一同（美季、マリン、徹、私）は体育館倉庫裏の一角に集っていました。

「あのさ、実を言うと状況があんまり理解できてないんだよね。」

徹は“わくわく”と“ドキドキ”の入り混じった好奇心に満ち溢れた顔をしていた。

「これだから馬鹿なやつは困るんだから。」

美季はあきれたように目を伏せた。

「美季。学力は徹のほうが上だけど。しょうがないから理解力に欠けている徹君のためにあたくしが、朝の話をスーパー分かりやすく説明して差し上げるわ。」

美季をなだめている割には、マリンは徹のことを思いっきり見下した言い方をしました。

「だから理紅はね、瑠璃と幼馴染なの。それで瑠璃が好きな。瑠璃もたぶん気づいてないと思うけど、きっと理紅が好き。つまり両想いね。しかーし、あるとき素敵な甘南ちゃんを見てうっとり目ぼれしちゃったってわけなの。」

「ちょ、ちょっと待って。」

美季はマリンを引きずって、徹から少し離れた場所へ行きました。

「徹は甘南が自分のこと好きってしらないんだよね？ だったら、ここにいちやだめなんじゃない？」

「そうなんだけど、でもこういう話の場合どうしても、仲のいい男友達っていう役は必要になってくるのよねー。」

マリンはしみじみと言いました。二人が戻ってくると徹は不思議そうな顔をしましたが、マリンは無視して話し始めました。

「けれども甘南ちゃんには大好きな人がいて・・・という事態なの。さてこれをどうするかっ。」

「ふうん。ややこしい話だな。っていうかさ、理紅も好きになるの早すぎじゃ・・・。」

「これは調査の必要性があるわね。とりあえず明後日の放課後までにこれに関する情報を各自集めること。以上！解散」

こうして、美季と瑠璃は美術部に、マリンと徹はテニス部に、私は自宅へとそれぞれ分かれたのでした。

―今日は情報交換の日になります。有力な情報を持ってきたのはマリンでした。

「徹と一緒に理紅からこんな情報を聞いてきたわ。理紅と瑠璃は幼稚園のときはずっと二人で一緒だった。瑠璃は小さいときからなんでも理紅に頼ってばかり。でも最近の瑠璃は全部一人で解決しちゃってるような気がするって理紅は言ってた。」

「理紅はさ、今でも少しは頼って欲しいんじゃないかな。小さいときみたいにな・・・。」

徹が遠くを見つめて言います。

「じゃあ、このことを踏まえてどうすればいいんだろ。あたしたち。」

美季が言うと、マリンはにやりとして

「全部あたしたちがやんなくても大丈夫。たぶん、もう少しでことは動き出すはず。」

謎めいたことを言いました。

このマリンの謎の予言の意味は、今日のうちに分かることとなったのでした。

―。もうすっかり秋だなあ。

そんなことを思いながら美季は一人校庭のそばの並木道を家に向かって歩いていました。

「美季い――！」

突然美季の後ろから、瑠璃が走ってきました。

「一緒に帰ろう。」

瑠璃と美季は並んでしばらく無言のまま歩きました。

「あのさあ、美季。」

瑠璃はいきなり改まった口調で、美季を見据えました。

「ん？」

のんびりした声で美季が返事を返しました。

「あたし……、恋してるみたい……。」

突然すぎるその言葉に美季は一瞬ぼかんとしましたが、すぐに取り直して

「恋って誰に???」

と先ほどとは打って変わって真剣に聞き返しました。

「……、理紅に。」

そういつて、美季は目を大きく見開き立ち止まり、瑠璃は顔を下に向けて立ち止まりました。

二人の間を秋の涼しげな風が通り抜けました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2211y/>

アイツに恋してる

2011年12月3日13時52分発行